

自画じがに題だいす

夏目漱石なつめ そうせき

幽居ゆうきよ 人ひと 到いたらず

独ひと坐ざして 衣ころも寛ゆるやかなるを 覚おぼゆ

偶たま解かいす 春風しゅんぷうの意い

来きたり 吹ふく 竹たけと 蘭らんと

【作者】夏目漱石(一八六七〜一九一六年)(慶応三年〜大正五年)英文学者、小説家、名は金之助、江戸牛込の生まれ、明治二十二年漢詩文集「木屑録」から漱石と号す。松山中学、第五高校教師を経て英国留学。帰国後、一高教授・東大講師を勤め、その間、華々しい文学活動を展開した。

【語釈】*自画に題す…自分の画いた画の余白に詩を書きつけること。(この詩は竹と蘭を描いた絵に書きつけたもの)。

*幽居…世をさけた隠者の住まい。 *独座…ただ一人で座る。 *寛(ゆる)き…ゆるい。

【通釈】世をさけた静かなこの住まいには人の訪れることもなく、只一人座っていると、病のやつれから着物のゆるやかなのが分かって淋しい。

この事からゆくりなくも私は、春風恨みをひく……という言葉の意味を理解し得たが、春風よ遠慮はいらない、吹き来たって私が画いた竹と蘭に春を与えよ!!